

2023年6月18日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「目から涙をぬぐいなさい」

聖書：エレミヤ書31：15～17

今年、78年目の沖縄「慰霊の日」を迎える。長い年月が経過しても戦争の悲しみ、親、兄弟姉妹を失った悲しみは、ぬぐえないもの。毎年のように糸満にある平和の礎に刻まれた名前をさすりながら涙するお年寄りの姿を見かける。生きていればどんな人生であったであろうかと、家族のものであれば思い描くものである。無残にもたたれた命に無念さが残る。戦後、その悲しみをぬぐう努力はなされてきたのか？

エレミヤ書は、国の誤った判断が戦争を招き、多くの若者が戦争にかり出され、戦死し、敵国へ連行されて行ったことが語られている。「もう息子は帰ってこない」苦悩に満ちた嘆きの涙。慰めをも拒む母たちの姿がそこに記す。このエレミヤ書は、預言者エレミヤが記した言葉だが、この時代は、戦争へと向かうユダ国に対して警告し続ける預言者エレミヤがいる。しかし、その警告を聞こうとしない時の王、時の政治家の姿があった。

この「ラマで声が聞こえる」とは、「ラケルが息子たちのゆえに泣いている」からであるが、この「ラケル」とは、アブラハム、イサク、ヤコブと続く族長たちのヤコブの妻ラケルのことを言う。そして「ラマ」とはラケルが死んで葬られた地名（あるいは葬られた丘の名称）のことであろう。ラケルから多くの子孫を生み、その子や孫たちが戦争で殺され、連行された状況を嘆き苦しみ、悲しみを表現している。この言葉は、今、この時も泣いているであろう母たちを代弁するかのようには表している。

主なる神は、戦争で息子を奪われ、廃墟にたたずむ母たちを見ている。嘆き苦しみ、絶望感に打ちひしがれる人々を見ている。「泣き止むがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる」と主は言う。それは、廃墟とされたこのパレスチナの地にイエス・キリストは立たれるからだと見ることが出来る。廃墟に立つ主は、沖縄の悲しみの涙も「ぬぐいなさい」と言っておられるはずである。では、“涙をぬぐう”とはどういうことか？

預言者エレミヤは、この世の歴史、現状を、この国の行く末をしっかりと見ていたからこそ、時の王に、政治家に警鐘を鳴らし続けた。今日の預言者的役割を担わされている教会はどうか。教会は、歴史に、現状に向き合っているだろうか。戦争の悲劇を二度と起こしてならないために平和を築くことが教会には課せられている。その預言者的役割を担わせて頂く時、「目の涙をぬぐう」ということに繋がるのではないかと思う。もう涙を流す歴史を作ってはいけない。「沖縄慰霊の日」を覚え、まことの平和を祈ろう。

（神谷）